

小島一郎 写真家。短い生涯を、青森を拠点に北国の風景を撮り続け、高く評価されている。

こじまいちろう

護憲三派圧勝1924 = 青森市大町で、玩具商の傍ら写真材料を扱う(小島商店)平八郎・たかの子に生まれる。

9人兄弟(男4人・女5人、後妻の子を含めて)の長男で、父は青森県写真材料商組合の初代組合長を務め、県内で初めてアマチュア写真家の懸賞写真の募集を始めるなど、県写真界の草分け的な存在で、写真家としても活躍していた。

世界恐慌・・1929 = 5歳：母が当時青森市内で流行した腸チフスで死去。

満州事変・・1931 = 7歳：父が再婚。

国際連盟脱退1933 = **9歳**：

日中戦争始・1937 = 13歳：青森県立女子師範学校付属小学校を卒業し、青森県立商業学校に入学。

日米開戦・・1941 = 17歳：卒業後、家業の写真機店を手伝う。第11回東奥美術展写真の部で「たそがれ」「閑日」が入選。
・・・・・1942 = **18歳**：第12回東奥美術展写真部門でも「冬の日ざし」「早春」「淡雪」が入選。

年金+総武装 1944 = 20歳：徴兵されて第47師団に所属、弘前での訓練期間中、画家をめざす川嶋佛吉と出会い、以後、親交。日中戦争に出征し、漢口で交戦。

敗戦・・・1945 = 21歳：済南臨時予備士官学校に属すうちに、敗戦となり、
新憲法公布・1946 = 22歳：青島の俘虜収容所を経て復員。空襲で焦土と化した故郷の姿に衝撃を受ける。

代用教員などを行いながら戦後の混乱期を過ごし、
極東裁判決・1948 = 24歳：食糧配給公団青森県事務所に就職。公団の職員による野球チームで、投手を務めたりするが、

独立回復・・1951 = **27歳**：公団が廃止。体調を崩したこともあり、再び家業の写真機店を手伝うようになる。

TV放送始・・1953 = 29歳：青森市浦町の薬店(松井愛生堂)の長女弘子と結婚。弟啓佑が早稲田大学文学部英文科卒業。

自衛隊発足・1954 = 30歳：長女道子が誕生。のちに国際的報道カメラマンとなる澤田教一が(小島写真機店)に入り、小島の叔父が経営する三沢基地内の写真機店に移り、本格的に写真を撮り始める。*写団(北陽会)会員となり、(アサヒカメラ)4月号で、「オブジェ」が準佳作、5月号では「無限」が佳作入選。「パイプ」が東奥美術展特選。

55年体制始・1955 = 31歳：弟啓佑が新潮社に入社。次女法子が誕生。津軽半島上磯地方を撮影し、うち「土運びの女達」が、

国連加盟・・1956 = 32歳：*{(サンケイカメラ)の月例三等入選に続いて、朝日新聞主催(国際写真サロン)に入選。(カメラ毎日)に下北半島で撮影した「村の半鐘」「海ぞいの家」「雨の日の舟小屋」が掲載され、「The way home(帰路)」がアメリカ(ロチェスター国際写真サロン)に入選。取材で青森を訪れた名取洋之助と地元写真家の懇談会で出会い、

なべ底不況・1957 = 33歳：弟啓佑が新潮社社員表彰を受け、写真部の統轄者として写真業務全般を担当。八甲田酸ヶ湯を訪れていた名取と再会し、東京での個展の話が具体化。「下前より岩木山を望む」が青森県観光写真特選一席。(北陽会写真展)では代表となっている。この年、親友川嶋佛吉からのサポートも得て、津軽地方を撮り始め、

インスタラマ・1958 = 34歳：東京銀座小西六フォトギャラリーで、第一回個展(津軽)を開催し、大阪、福岡にも巡回。作品7点が(岩波世界)の「農村の夏津軽にて」に掲載され、

美智子妃・・1959 = 35歳：弟啓佑が日本写真協会新人賞受賞。続いて3点が「雪津軽にて」に掲載される。(北陽会写真展)では会長。

安保闘争・・1960 = **36歳**：青森銀行の依頼で岩木山神社を撮影。南部地方の風景を撮影し、「北国」が第1回県展新人奨励賞。

たいがい病始・1961 = 37歳：この年、沢田教一が店を離れる。*下北半島各地で撮影後、父の反対を押し切って、フリーランスの写真家として活動するために上京。まもなく、左半身がしびれる脊髄性の病気にかかる。「下北の荒海」が(カメラ芸術)に掲載され、カメラ芸術新人賞。(中央公論)グラビアページに、「暮れゆくみちのく」という題で、同郷の児童文学作家北島八穂の文とともに津軽の写真6点が掲載されたのを契機に、(新潮社)から写真集「津軽」の話がもちあがる。名取の長女のポートレートや家族写真を撮影しながら、名取家の食客となっていた。

全国総合計画1962 = 38歳：師と仰いでいた名取洋之助が死去。下北半島での撮影を核に、東京銀座の富士フォトサロンで、第2回個展「凍ばれる」を開催し、

TV宇宙中継始1963 = 39歳：(カメラ毎日)に東京を被写体とした初めての作品「東京の夕日」掲載。妻子を青森の実家に帰した後、都内を転々、(週刊新潮)グラビア特集に、弟の写真とともに掲載され、前年の東京のものを核に、青森県内で初の個展「凍ばれる」を開催、(新潮社)から石坂洋次郎・高木恭造との共著で、生前の唯一の写真集となる詩・文・写真集「津軽」が刊行されるが、北海道でオホーツク海の流氷撮影に挑むうち、

東京初光 1964 = 40歳：*過酷な撮影行によって体調を崩し、東京を引揚げて青森市の自宅にて静養に努めるが、(カメラ芸術)に「道」が掲載されたのを最後に、心臓麻痺で没した。

(カメラ毎日)にカラー写真「鳶沼にて」が遺作として発表される。